

「Mさんの様子で気になることがありますので、一度学校に来ていただけませんか。」担任のN教諭から連絡を受けた保護者は、また注意をされるのかと、重い気持ちで教室に向かった。

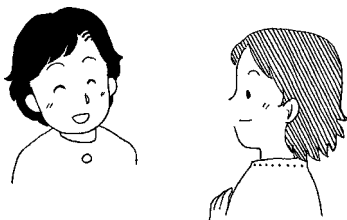
ドアをノックすると、N教諭がドアを開け、「ああ、お忙しいところご苦労様です。」とにこやかに迎えてくれた。教室の中には、机がL字型にセットしてあった。

「最近、家で変わった様子はありますか？」

保護者は、あまり学校のことを話さなくなったり、口答えが多くなったり、気になっていることはあったが、そのことを話したほうがよいのかどうか迷っていた。

「実は、最近学校で授業に集中できなかつたり、いらいらしているような態度を見せたりすることがあるので気になっています。家での様子を聞かせていただいて参考にしたいのですが…。」

保護者は、家での接し方などで注意を受けるものとばかり思っていたので、N教諭の言葉を意外に思った。子供への接し方では、自分でも困っていることがあったので、思い切ってN教諭に話してみることにした。



保護者にとって、担任など教師と話すことは、抵抗感のあることです。特に、何か心配な行動が見られて学校に呼ばれた場合などは、不安を感じ身構えるものです。面談を実りあるものにするには、保護者の側に立った配慮が必要です。

面談の際の留意点

- ① 二者面談であれば90°に座る。複数の教師で面談をするなら、担任は保護者のとなりに座るなど座る位置にも配慮をする。
- ② 保護者が来校した労をねぎらう。
- ③ リラックスさせ情緒の安定を図る。
- ④ 面談の目的をはっきり告げる。
- ⑤ 子供の問題を話すときは、事実を具体的に客観的に伝える。
- ⑥ 保護者の不安な気持ちを受け止める。(受容)
- ⑦ 保護者の話を最後まで聴こうとする。(傾聴)
- ⑧ 問題に対する安易な言動をつつしみ、保護者を批判したり非難したりしない。
- ⑨ 問題の解決のために、共に考えていくという姿勢をもつ。

保護者が主体的に問題解決に取り組んでいけるようにする

- ① 教師は保護者と一緒に考え、サポート役であることを明確にする。
- ② 子供のよさや変化に気付かせ、子供に信頼感がもてるようにする。
- ③ 保護者にしかできない役割を再認識させ、勇気づける。
- ④ 子供の問題を自分の問題として意識できるように促す。